

令和元年6月19日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K09105

研究課題名(和文) 発達障害傾向、愛着パターン、プレゼンティーズムと職場・学校不適応及び抑鬱との関連

研究課題名(英文) Relationship between the developmental disability traits / attachment style / presenteeism, and workplace or university maladjustment / depressive symptoms

研究代表者

鈴木 知子 (Suzuki, Tomoko)

国際医療福祉大学・医学部・助教

研究者番号：60728682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：種々の学部および特に医療系の学部に着目した大学生約1500人、労働者約1200人の発達障害傾向、メンタルヘルス、社会経済的状況、生活習慣を収集したデータベースを作成した。結果より発達障害傾向とプレゼンティーズムやうつ症状を含む職場・学校不適応、社会経済的状況、および生活習慣との関連を示した。また、発達障害の当事者の困り感についての調査、色々な立場から当事者を支援している方々へのインタビューよりサポートなどの環境要因の調整方法を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では発達障害、特に自閉症特性やその下位尺度の程度を定量評価し、職場や大学での不適応の指標としては、本来の力の何%の力を発揮しているか、病気により持っている能力が発揮できていないかの指標としてのプレゼンティーズムとうつ症状などの指標を用い、環境要因として社会経済的状況や、ストレスとサポートの状況、生活習慣の情報を収集して解析検討を行った。発達障害自体の有効な治療法は無いが、環境調整をしていくことで発達障害に起因する職場や大学での不適応を軽減・予防していくことが可能と思われ、それに繋がる結果を示すことができ学術的意義や社会的意義が高いと考えられる。

研究成果の概要(英文)：We developed a database consisted of approximately 1,500 university students and 1200 workers with the data evaluating developmental disability traits / mental health and socioeconomic status / lifestyle. The results show the relationship between developmental disability traits / mental health and socioeconomic status / lifestyle. In addition, we examined how to handle environmental factors through the survey on the sense of difficulty for the persons with the diagnosis of developmental disability and the interviews with the persons from various positions who support the patients.

研究分野：メンタルヘルス

キーワード：メンタルヘルス 発達障害 自閉症特性 ADHD傾向 うつ症状 プレゼンティーズム 不適応 生産性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

職域において、仕事や職業生活について強い不安、悩み、ストレスを感じている労働者は52.3%であり、また、メンタルヘルス不調により連続1か月以上休業又は退職した労働者がいる事業所の割合は1000人以上の事業所では約9割(厚生労働省平成25年労働安全衛生調査)と大きな問題となっている。また、大学生に関しても発達障害のある学生からの相談を受けたことがある大学は全国の大学中3割と報告されている(佐藤克敏, LD研究2006)。以上のように、職場・学校不適応者の疫学調査を行い、機序を解明し予防策や対応策を講じることは重要な課題となっている。

(1)近年、職場不適応や難治性うつ病の背景因子の一つとして注目されている発達障害の一つである自閉スペクトラム症について、我々は文部科学省特定領域研究「社会階層と健康」の職域コホートJ-HOPE(Japanese Study of Health, Occupation, and Psychosocial factors related Equity)を用いて検討を行ってきた。(2)この発達障害傾向に影響を与えるとされる愛着Attachmentは、対人関係やサポート体制を築く機能との関わりが深いことから、近年、注目されている。(3)健康上の理由で仕事の生産性が低下している状態(プレゼンティーズム)は、労働損失としてのインパクトが大きく、休業よりむしろ大きいとされ問題視されている。我々はプレゼンティーズムが精神的な理由による病欠のリスクになることを示し、最適なカットオフ値を求めた。(4)発達障害傾向が強くても、困ったことに直面していない将来支援群、周囲に適応している適応群、および困り感が高く支援が必要な支援群と、主観レベルでは支援対応が異なる場合があるため、「困り感」の調査票(山本奈都実, 高橋知音, 2010)を用いて予防・対応策を検討することは意義のあることと考えられた。

以上のように発達障害傾向と愛着パターンの程度による、ストレスやサポート、社会経済的状态、生活習慣などの環境要因と、職場・学校不適応としてのプレゼンティーズム、うつ症状などの関連はまだ明らかではなかった。

2. 研究の目的

(1)職場・学校などの不適応や難治性うつ病の背景因子の一つとして注目されている発達障害傾向、(2)それに影響を与えるとされる愛着パターン、(3)健康上の理由で仕事の生産性が低下している状態(プレゼンティーズム)と、抑うつ度、ストレスやサポート、社会経済的状态、生活習慣との関連についてエビデンスが不十分であるため、(1)~(3)を評価して職場・学校などの不適応の機序解明を目指し、改善に役立つような不適応を軽減および予防するための有効な方法の検討、及び、用いる調査票の妥当性を検証する。

3. 研究の方法

発達障害傾向が高いと、高等学校までは順調であったのが大学に入学し環境の変化により困り感が生じ大学生活に適応できなくなる例が多いことにより、全国在住約1000人の大学生を対象にWeb調査を行い、発達障害傾向の程度や愛着パターン別とメンタルヘルスとの関連を検討した。また、医療系の職業は対面の仕事が多く、発達障害傾向が高いと対人関係でうまくいけなくなりメンタル不調におちいる例が多い。そのため、某大学の医療系学部の学生約500人を対象に医療系ならではの特徴を検討した。

一方、大学卒業までは順調であっても社会人となり環境の変化により困り感が生じ職場に適応できなくなる例も多いことより既存のデータセットJ-HOPEを用い発達障害傾向の内の自閉症特性(自閉スペクトラム症傾向、ASD傾向)および愛着パターンと仕事の生産性(プレゼン

ティーズム)を含むメンタルヘルスとの関連を検討した。発達障害傾向の内、大人の発達障害に多い自閉症特性のみならず ADHD 傾向についても評価し、又、生活習慣の情報も併せて一般の労働者約 1200 人を対象に Web 調査を行い、発達障害傾向が高くても生活習慣改善によりメンタルヘルス不良のリスクが軽減可能に繋がる予防因子を検討した。

発達障害と診断された当事者約 20 人に対しては質的に検討を行うために発達障害の評価と困り感について調査票に自由記載して頂いた。また、発達障害の当事者への実態を把握するため当事者に支援している支援団体経営者、発達障害専門医師、産業保健師、支援団体職員、精神保健福祉士、社会福祉士などの色々な立場の方にインタビューを行った。

発達障害傾向が高いと認識しているが現在働いている約 400 人を対象に Web 調査した既存データセットを当事者支援団体より解析依頼を受けた。本調査項目は困り感を感じている当事者の方が作成したものであり当事者が何に困り感をいただいているかの理解を深める調査票であった。

4. 研究成果

日本全域に事業所がある企業勤務の約 2000 人を対象とした調査では、発達障害の内、自閉症特性が軽度から重度に連続的な分布を示し自閉スペクトラム症とそうでない人の間で白か黒というようなクリアなカットオフ値が無いことを日本の職域集団において確認した。さらに自閉症特性の下位尺度として 2 つの領域(数字やパターン化への興味、社会的行動の困難)、社会的行動の困難の下位尺度として 4 つの領域(想像力の困難、型どおりの行動への執着、社会的スキルの困難、注意の切り換え困難)を自記式調査票である AQ-short 調査票(Hoekstra et al, J Autism Dev Disord 2011)を用いて評価した。いずれの下位尺度についても同様に連続的な分布を示した。この結果は Wing の提唱した自閉症特性は連続的に分布するという仮説、または現在の標準的な診断基準 DSM-5 と一致し、日本の働いている人たちでも確認されたことになり、多かれ少なかれ誰でも自閉症特性を持っていることを示したことになる。

自閉症特性と対象者の社会経済的状況や生活習慣との関連について、

- (1) 性別は男性の方が女性より自閉症特性が高値を示し、海外の報告例と同じ結果を示した。
- (2) 年齢については、自閉症特性とは関連が無く、これも海外の報告例と同じ結果を示した。ただし、例外として低年齢ほど下位尺度の「型どおりの行動への執着」と「注意の切り換え困難」の特性値が高く、考えられる可能性として、この 2 領域の下位尺度は職場への適応が難しく適応できずに辞めていくため、低年齢ほど値が高くなった可能性が考えられる。
- (3) 社会経済状況(SES; 学歴、職位、年収)については、SES が低い労働者の方が自閉症特性は高値を示した。この結果は、仕事のスキル不足によるのではなく、周囲の自閉症特性についての先入観と理解不足により、自閉症特性の高い人が差別を受けて社会経済状況が低くなる可能性と、自閉症特性の症状による困り感により自身の能力を発揮できていない可能性によるものが考えられる。一方、例外として、SES の高い労働者は下位尺度「数字やパターン化への興味」の特性値が高いことを示した。この結果は、自閉症特性が高い人は科学の力が優れているという報告例(Baron-Cohen et al.)に類似している。
- (4) 生活習慣については、しない(飲酒しない、喫煙しない、余暇に運動しない)労働者の方が、自閉症特性が高値を示した。例外として、余暇に運動する労働者の方が下位尺度「数字やパターン化への興味」の特性値が高いことを示した。考えられる理由として、ASD の方は 2 次障害として抑うつリスクが高いと報告(Sterling et al, Skokauskas et al, Lugnegard et al.)されており、うつ症状により生活習慣が行動しない傾向になる可能性が考えられる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

すべて査読有

Suzuki T, Miyaki K, Eguchi H, Tsutsumi A.

Distribution of autistic traits and their association with sociodemographic characteristics in Japanese workers.

Autism. 2018 Nov;22(8):907-914.

Oshio T, Tsutsumi T, Inoue A, Suzuki T, Miyaki K.

The reciprocal relationship between sickness presenteeism and psychological distress in response to job stressors: evidence from a three-wave cohort study.

J Occup Health. 2017 Nov 25;59(6):552-561. doi: 10.1539/joh.17-0178-0A.

菅万希子、荒木大恵、鈴木知子、宮木幸一、中山健夫.

Presenteeism 医学と経営学の融合にむけた Pilot Study

仕事能力研究 2017 第 5 号、pp.25-42

〔学会発表〕(計 8 件)

鈴木知子、和田耕治、池田俊也

大学生の発達障害傾向と大学生生活のパフォーマンスまたは授業の出席率との関連

第 77 回日本公衆衛生学会 2018 年 10 月 24 日-10 月 26 日 福島 (ビッグパレットふくしま)

日本公衆衛生雑誌 2018; 65: 462.

鈴木知子、和田耕治、池田俊也

発達障害傾向の高い大学生の抑うつ症状に対する生活改善との関連

第 8 回国際医療福祉大学学会 2018 年 8 月 26 日 東京

鈴木知子、池田俊也、宮木幸一

発達障害傾向が高い労働者の働きやすい職場について

第 91 回日本産業衛生学会 2018 年 5 月 16 日-19 日 熊本

鈴木知子、宮木幸一、中里道子、池田俊也、シュムブラング・ナッタデット、児玉裕子

自閉スペクトラム症傾向と注意欠如・多動性障害傾向の程度による大学生の精神健康状態

第 76 回日本公衆衛生学会 2017 年 10 月 31 日-11 月 2 日 鹿児島

日本公衆衛生雑誌 2017; 64: 316.

Akizumi Tsutsumi, Akiomi Inoue, Tomoko Suzuki, Akihito Shimazu, Masaya Takahashi, Norito Kawakami, Sumiko Kurioka, Hisashi Eguchi, Koichi Miyaki, Kazuhiko Enta, Yuki Kosugi, Tkafumi Totsuzaki.

A large scale working panel survey to explore the mechanisms of social gradient of health
6th International Congress of the International Commission on Occupational Health - Work

Organization and Psychosocial Factors (ICOH-WOPS) Scientific Committee, August 29 to September 1, 2017, Mexico City.

鈴木知子、宮木幸一、堤明純

発達障害傾向と仕事の生産性（プレゼンティーズム WHO-HPQ 日本語版）の関連

第 90 回日本産業衛生学会 2017 年 5 月 11 日-13 日 東京

産業衛生学雑誌 59 巻臨時 P367 (2017)

鈴木知子、宮木幸一、堤明純

職域集団における発達障害傾向と社会経済状況、生活習慣との関連

第 27 回日本疫学会 2017 年 1 月 25 日-27 日 甲府

鈴木知子、宮木幸一、江口 尚、堤 明純

労働時間と仕事の生産性（プレゼンティーズム）の関連

第 89 回日本産業衛生学会、2016 年 5 月 24 日-27 日 福島

産業衛生学雑誌 (1341-0725)58 巻臨増 Page224(2016.05)

〔図書〕(計 1 件)

宮木幸一

発達障害を職場でささえる：全員の本领発揮を目指すプレゼンティーズムという視点

出版社：東京大学出版会 (2018/10/31)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：宮木 幸一

ローマ字氏名：(Miyaki Koichi)

所属研究機関名：国際医療福祉大学

部局名：医学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20327498

(2)研究協力者

研究協力者氏名：堤 明純

ローマ字氏名：(Tsutsumi Akizumi)

研究協力者氏名：江口 尚

ローマ字氏名：(Eguchi Hisashi)

研究協力者氏名：宮本 圭子

ローマ字氏名：(Miyamoto Keiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。